

「春秋」とは何か(二)

高橋君平

一口に春秋というのが春秋は実は四つの各別の文献から成り立っているのであるから、それをまず明確に区分しておかねばならない。

- 一、春秋経
- 二、春秋左氏伝
- 三、春秋公羊伝
- 四、春秋穀梁伝

春秋経は、春秋二百四十二年間の歴史年表である。中国には古来春秋経だけを単行したものがない。春秋左氏伝、春秋公羊伝、春秋穀梁伝の長い年次記事の前に、わずかに二、三行ずつ分割収録されているために、長い伝文の裡に埋没した形となり、経のための伝が、逆に伝のための経のように主客顛倒し、「春秋経」に施した左氏の「伝」をば、経伝を併せたまま「春秋左氏伝」「左氏伝」「左伝」と呼びならわし、春秋経と左氏伝とは別個の二者であるという認識がなくなってしまうことは、究学上看過できない過誤である。

前稿(一)に日本で単行された「校正音訓 春秋 改点 完」を付録したのは、経だけを一書にまとめて、伝とは全然別個であることを明確にするためである。

春秋左氏伝 歴史物語—小説—文学 經文に現われる人間社会の諸相を、それぞれ物語にまとめたもの、ただし儒教の道德観に反しないように。

春秋公羊伝 經文の解釈を主とする、その方法として文法に言及する。中国で文法を扱った最初の文献であろう、しかしその文法論は概して誤解である。がその誤解を指摘したものがほとんどないのはどうしたことか。春秋穀梁伝 經文解釈の方法が公羊と同じだから、公羊の拾遺とみなしていいだろう。

小論は右の四種が、各別のもので、それぞれどういふものであるか、特に經と伝とは、文体も内容も甚だしく異なるものであることを論証しようといふのである。

春秋經

春秋は「魯之史記」である。魯国の史官が春秋二百四十二年間に各地各国に起きた要事を年次に従って記録した一種の歴史年表である。孔子とは徹頭徹尾無関係である。

ところが孟子の春秋觀以来、春秋經は孔子の作ないし刪修ということに相場が定まったといふことは奇怪千萬である。彼の春秋説は断乎排撃されなければならない。

孟子の春秋説

〔滕文公下〕 世衰道微、邪説暴行有作、臣弑^{スル}其君^ヲ、有之、子弑^{スル}其父^ヲ、有之、孔子懼^レ作^ル春秋。(邪説暴行が起きた……)ので、孔子がこれでは困るといふので春秋を作った。春秋、天子之事也、是故孔子曰、知我者其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎。(春秋は天子に關連することだから我、(孔子)が命運を賭けて作つたのである。だから我が正否は春秋を読むだけで解るだろう)……孔子成^ス春秋而乱^ス臣賊子懼。(孔子が春秋を作つたので、

乱臣賊子が畏懼した)

という文面だが、おそらく「乱賊が自戒自肅してくれればいいがナァ」という孟子の願望を托した言と思われ。しかし春秋という書ができたからといって乱賊が懼れてなくなる——イヤ減少するはずはない。歴史がそれを実証して余りある。

〔離婁下〕 孟子曰、王者之迹熄而詩亡、詩亡然後作春秋、(王者がいなくなったので「詩」が亡びてしまった、詩が亡びたので、今度は「春秋」ができたのである)

王者と詩、詩と春秋と、一体どういう関係があるのか、孟子は何も説明していないが、おそらく何も関係はないのだろう。とすると、これは、孟子個人の勝手な論義といわざるを得ない。

晋之乗、楚之檣杙、魯之春秋、一也。

この三者が等しく史官の書いた歴史の記録だというなら、「魯之春秋」だけを前二者と区別して「孔子作春秋」というのは明らかに矛盾ではないか。

〔盡心下〕 孟子曰、春秋無義戰、彼善於此則有之矣。征者、上伐下也、敵国不相征也。(春秋には、AはBよりマシな戦いというはあるが、義理にかなった「戦」というものはない。「征」というのは上位者(王)

が下位者(侯国)を伐つことであり、対等国の間には「征」はあり得ない)

春秋には「伐」は無数に出てくるが「征」は一度も出てこないから、孟子の説明は正しいだろう

孔子とその門下の言行録である「論語」は儒教の聖典として二千五百年來今日まで長く広く世に行われているが、孟子のいう「孔子曰知我者其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎——孔子が精魂を打ち込んで書いた」春秋について一言半句も載っていない(詩や書は稀に出てくるのに)というのは一体どういうことか。ただこの一事だ

けでも、春秋が孔子の作でないこと、孔子と何の関係もないことは充分に証明されるだろう。

以上孟子の春秋説は稚拙で首尾一貫せず、結局彼個人の恣意の妄断——でたらめといわざるを得ない。がしかしこいう解釈も成り立つかも知れない：春秋二百四十二年間の史実記録としては、春秋経ほど古く、正確で、詳密なものはないから、この貴重すべき典籍を後世に伝えるためには聖人の名を借りるほかはないとの考えから、孟子は春秋は孔子の作でないことをよく知っていながら、敢て「孔子作春秋」と高言したのかも知れない。いずれにしても「孔子」と「春秋」とは何の関係もないことは明らかである。

司馬遷の春秋説

〔史記 孔子世家〕 子曰「弗乎、弗乎、君子病没世而名不称焉。吾道不行矣。吾何以自見於後世哉」乃因史記作春秋、上至隱公、下訖哀公十四年、十二公。(……孔子は死後、後世に自分の名と教とを残さんがためにはどうしたらいいか？そこで魯国の史官の書いた歴史記録によって春秋を作った)——とは孔子世前の志行に反するではないか。

……約其文辭而指博。(その文句は簡約であるが、その趣旨は深く且つ広い)——約其文辭は「経」、而指博は「伝」。——故吳楚之君自稱王、而春秋貶之曰「子」、踐土之会実召周天子、而春秋諱之曰「天王狩於河陽」。推此類以繩当世。貶損之義、後有王者奉而開之。春秋之義行、則天下乱臣賊子懼焉。(故に吳楚の君は自ら「王」と称したが春秋はこれを貶して「子」といい、踐土の会は実際は周の天子を召し出したのである。春秋は諱みて「天王は河陽に狩に來た」といつている。こういうふうにして当世の過誤を正したのである。貶損の義例というのは後世の王者もみなそれに従ったのである。このように春秋の義例なるものが行われるれば天下の乱臣賊子が懼れるであろう。)——(畏懼して影を潜めるだろう)

しかし貶損の義例というのは左氏伝にかかわる問題で、春秋経とははじめから無関係である、それを司馬遷がここでとりあげたのは、彼がすでに春秋経と左氏伝とを混同した証左である。孔子の没後四百年、左氏伝成立後二百年も経っていない彼が、すでに春秋経と左氏伝とを混同しているということは、重大の過誤であり、誰よりも歴史に厳密であるはずの史馬遷がすでにそうであるのだから後世の学者が、ずっと今日まで誰一人経と伝とを分別しなくなつたということとはごく自然のなりゆきといえるかも知れない。

彼らはいうであろう：「経」は文辞簡約に過ぎ詳密にはわからないから「伝」によって博厚の趣指を知るほかはない、だから経と伝は分別すべきでなく、必ず併読すべきであると。全くその通りである。がしかし

一、経・伝は文体が甚だしく異なり、「経」を普通の文章である「伝」と同一視することは到底できない。

二、伝は経に表われる一部の人事だけをとりあげているに過ぎず、人事以外の天文・氣候・自然現象などについては時に経文をそのまま載せることはあるが、伝は一切立てていない。

三、「貶損之義」は、経には全く出ていない、イヤ出しようない文体だから、伝者の恣意の作偽というほかはない。

以上三点を明確にするためには、まず経・伝を明確に分別する必要がある、というのが僕の主張であり、この小論を書く所以である。

最後の一句は、孟子滕文公下の「孔子成春秋而乱臣賊子懼」と全く同じ。

孔子在位聴訟、文辭有可與人共者、弗独有也。至於為春秋、筆則筆、削則削、子夏之徒不能贊一辭。弟子受春秋、孔子曰：「後世知丘者以春秋、而罪丘者亦以春秋。」

(孔子は役人として訴訟を聞く時は誰でも用いる言葉を用い、自分だけの用語というものはない。ところが春秋を書くときは、書くべきものは必ず書き、削るべきものは必ず削った、だから子夏の連中も一言も付

け加えることができなかつた。弟子に春秋を授けた時、孔子曰く「後世ワシの正否善悪を判断するのは必ず春秋経に由るだろう」と。

最後の句は、孟子滕文公下の「知我者其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎」と異辭同義。

司馬遷は経・伝を混同している点を除いては(孟子時代には三伝は未成立)大体孟子を踏襲している。

中国では古代から歴史は史官でないと言けないのであるが、孔子は史官になつたことがないから史記は書けないといふことは太史公司馬遷は誰よりもよく知っているはずである、だから「乃因史記作春秋」と逃げ道を残しているのであるが、経文を精読すれば、それが史官の記録した史記そのまま、孔子の筆削が加わっているとは到底考えられない。

春秋の文体

春秋経は魯の史官の作であるが、読者は前稿で披露した日本刊行の「春秋」を精読してみて下さい。その文体がいかに特異であるかが自然にわかるであろう。

一、純粹に客観記述で、作者の意思、感情は微塵も出ていない、イヤそういうものに入る余地が全くないのである。

二、曰語、云言、引用語が全くない。だから

三、終句助詞——也、乎、哉、而已、耳、矣、焉、の類が一つもない。虚字がない。

こういう文体では、いわゆる凡例や義例を設定することは不可能である。いわゆる義例は後世学者(伝考)の恣意の作偽あるいは彼自身の考え方であり、春秋とははじめから何の関係もないと断ぜざるを得ない。

四、一字句、二字句、三字句、四字句、五字句、など短い句が多い。長いものといへば①天王使宰咺来歸惠

公仲子之暋。(13字、隱公元年)②……會齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男滑伯滕子同盟于幽。(21字、莊公十六年)の類をあげられるが、①類は少なく②類は固有名詞が多く並んでいるだけで、文としては「会……同盟于幽」で、至極簡単明瞭である。だから春秋ほど読みやすい漢文はほかにはない、どうしてかくも簡単かといえ、これすなわち史官の客観的記録だからである。短句の累積だからである。僕はこれを歴史年表という。「史記」の各種年表はその文体が経文によく似ている、年表なるが故に簡単である。簡単なるが故に「伝」が要求されるのである。

春秋の内容

人・国関係

百二十四国の興亡、国を滅ぼすもの五十二、君を弑するもの三十六。(以上児島「解題」)

周王、諸公侯伯子男、高官名士、崩、即位、薨、卒(この字最多)、喪葬、祭祀、卜郊、朝、聘、奔、逃、亨、逆——をむかえる、如——へゆく、禘、雩、弑、殺、乱、遷、狩、到河、会(同・及盟、泄盟、唁、覲魚、筑城、災……軍事……戦、伐(この字極多)帥師、侵、入、取、囲、滅、救、成たいらぐ、敗、敗績

これら人間社会の出来事のうち主要なものを年次に従ってとりあげ「物語」に敷衍構成したのが左氏伝である。

こういう無味乾燥の少字句の集積を、孔子が精魂を傾けて書いたとは到底考えられないことだが、至聖孟子がひとたび声を大にして「孔子作春秋」と呼号すると後世の学者が翕然として追隨するとは、われわれには到底理解できない奇怪な現象である。がこれは中国学者特有の伝統的通弊によるもののように思われる。

一、聖人君子にはケチは付けない。——付ければ「非礼」になるのか。一、先学を論駁しない。——すれば

「非礼」になるのか。一、事物を合理的に探究しない。一、どんな矛盾も意に介しない。一、自己の主観的見解だけを表明する。

宋の王安名は春秋を断爛朝報(すたずたに千切れた官報)と罵倒したという(からには孔子作とは考えていないはず)が、「爛」字を削れば彼の春秋説は当たっていると思う。——コマ切れの記録を無教に集めた官報。

彼のように自己の主観の見解を四字にまとめて投げかけるだけで「何故そうなのか」を少しも説明しないということもまた、中国学者の伝統的通弊の一つのように思われる。

解題は「夫れ春秋は……二百四十二年間の事変は一切網羅せざるはなきなり。しかもいかに紛糾せる事変も必ず一句の中に収容せられしかば、歐陽修のいわゆる『簡にして法あり』の一言は、もつとも的中の言なり。

しかれども魯史亡びて孔子の春秋孤立せる今日において(案・魯史即ち春秋、孔子の春秋は不存在)、読者をして孔子の本意が那邊にあるかを領解するに苦しましむるは、至簡の弊に非ずや」というが、歴史年表であればこそ簡単なのが当然であり、またいかに丹念に読んでも「春秋は尊王の書、大義名分を明にするの書、乱臣賊子を筆誅するの書」というイメージはどうしても浮かばない、たとえ左伝を併読しても。原来春秋は徹頭徹尾孔子とは何のかかわりもない魯之史記——歴史年表であるということが後世の学者にどうして理解されないのかを只管奇怪に思うだけである。さすがに礼教の国、二千五百年前、孟子の根拠なき大言壮語を未だに遵奉しているのであらうか。

自然現象

経には、日星雷雨雹雪霜などの天に現われるもの、山崩、地震、水旱無氷などの地に現われるもの、昆虫鳥獸では蝨螟蜚蠹蟻鸚鵡など、農作物では麦苗李梅殺菽などが詳細に記録され少なくとも経の三分の一を占めているのは注目すべき事実である。由来孔子の学問は人文一遍であり天文地理には理解も興味もないのでは

ないか、とすれば彼の作であるとする春秋経に天文地理関係の事象をかくも多く且つ詳密に記録するはずがない。これもまた「孔子作春秋」を否認する有力な理由であり得る。

左氏、公羊、穀梁三伝とも自然現象について字句の解釈をするものが二、三あるが、伝を繋げてその実況を記述したものが全くないからその欠を補う意味で現代の実情を本稿10頁に二、三補述しておきたいと思う。

○天文

日食 三十六回 京都大学花山天文台齋藤澄三郎氏は次のように教えられた「食が地球上におこらないのに食ありと記録されたもの四個、中国では見られなかったと思われるもの一個あるが、記録はおおむね正しいと思う」(一九八二年一月)。すると中国では西紀前六、七百年前、すでに天文観測は相当正確であったと推測される。

○夏四月辛卯、夜恒星不見、夜中星隕如^{オツケトツ}雨。(莊公七年)現代語なら隕星隕得如雨——星が落ちその落ちぶりは雨のよう、雨が降るように星が落ちてきた。

十年ほど前、金沢大学慶松教授はこれはオーロラが現われたのである、と解釈しておられたが、僕はオーロラではなく流星群(ジャコビニ流星群?)が現われたのではないかと思う。

有星字……二回

○隕^{オツ}石^ユ于^ツ宋五。一回(僖公十六年)。左氏には伝はないが公羊には文法解釈がある：曷為先言隕而後言石、隕石記聞、聞其礮然、視之則石、察之則五。この文法解釈が誤りであることは公羊伝の部で更に検討する。

現代の事例：今年三月八日、在我国吉林省吉林地区、降落了一场空前規模的隕石雨。這是中外科学史上的重大事件。(紅旗一九七六年六月号七一頁)その規模や隕石が今までの世界歴史に見ない大きなものであることを説明してある。(左伝僖公十六年孔疏：星石霜言隕電雪蟲言雨者、其状似雨者称雨、不似雨者即称雨也)

○民生、天候、生物など

梁山崩 地震 6 大雨震電 雨雪(雪がふる) 4 大水(大水が出た) 8 有年(豊作) 2 大旱 2 饑

雨雹(雹がふる) 3 隕霜(霜がおりる、ふる) 2 不雨 5 正月雨 無氷 無水 無麦苗 無麦禾 李梅実

螟 2 蟻 蜚 蝻 7 雨螽于宋(宋にバッタが降る) 蚊

六鵠退飛 鸚鵡来巢 鼠食郊牛角

天候の変異は民庶の生命財産農作物に決定的な影響を与えるものであるが、春秋経にすでに克明にそれを記録しているのは、漢族がすでに古い時代から土着の農耕民族であった証拠である。

こういう重要事象について三伝とも伝を繋げない。公羊は字句の解釈をしたものがないではないが、左氏は人事によって物語を構成する方向に偏り、自然現象の実情が少しもわからぬということは伝としては大きな欠陥であるから、この経文論の最後に二、三の災害について最近の状況を記して、春秋時代を推測回想することにしよう。

○地震 一九二八年(昭和三年)頃、甘肅省に大地震があったという新聞報道を見たことがあるが実情はよくわからない。つい十年ほど前、河北省唐山市が地震のため瓦礫の街に化した状況が新聞に報道されたが、いま手許に記録がないのが残念である。

○雨螽于宋。(バッタが宋の国に降ってきた。文公三年)左伝には「雨螽于宋、隊而死也。」(墜ちて死んだのである——死んで落ちてきたのである)とあるだけ、それ以外は何もわからない。その現代版は如左：

昭和十五年四月から十九年二月まで、華北交通の開封鐵路局開封警備隊に勤務していた高橋勇治氏の談話：

昭和十七年(一九四二年)七、八月、麦の穫入れが済み粟が七、八寸に伸びた頃、ある日突然大暴風雨かと思われる轟音を立ててバツタの大群が押し寄せてきた。日本では見たことも聞いたこともないのでびっくり。河南省内の隴海鐵路、開封―民権間約四十キロの西側に發生し東へ飛び去る。十四、五日の間に三回来襲したかと思う。野菜や穀類が全部食い尽され、実や葉のなくなった茎だけが見渡す限り、空に向って立っている、薊あざみだけはそのまま、飛び去るバツタの羽が夕陽に輝いて見えた、などが印象に残る。幼虫は日本の蝗と同じく、六日で成虫になる、大きいのは体長六、七センチ。蝗の油のために一時鉄道がスリップして走れなくなったというから、死んだバツタが相当地上に落ちてきたものと思われる。現地農民は蝗(ホアン)虫という。神罰だから「没法子」と案外あきらめがいいようだが、やはり困惑の色はかくせない。隴海鐵路というのは、江蘇の海州から河南、陝西を経て甘肅省蘭州を結ぶものだが、当時は河南省内の一部が開通していただけ。春秋戦国時代の宋国は今の河南省あたりに当るのではないかと思う。

附記：当時開封市には警備隊原田兵团司令部、領事館、警察署、小学校があり、街には日本の料理屋、食堂、バー、その他各種の商店がたくさんあったというから、方に近い日本人が居留していたものと推測される。

○大水

経には 大雨雪(大いに雪ふる)、大雨雹(大いに雹ふる)四回、大雨(大いに雨ふる)二回、大水(大いに水いず)八回、などが出ているが伝がないので「大水」の程度はわからない。そこで一九八二年一月号「人民中国」(日語版)所載「天候異変と中国に起きた大洪水」(孫戦科氏の報告)と「水害後の天府の国」(文秋氏の報告)の一部を借用して「伝」の補充としたい。

○黄河上流の大洪水(孫戰科氏の報告より)

昨年(一九八一年)八月下旬以降、乾燥地帯の黄河上流の十八万平方キロの地区に連日雨が降りつづいた。雨量は二百ミリ以下であったが、黄土高原は植生の分布がほとんどなく、雨水の大部分は、大きな谷間の一つ一つに注ぎこみ、滔々たる流水となって黄河上流に溢れた。普通この一帯の黄河の流量は毎秒四百〇千立方メートルであるが、今度は四千立方メートル以上に急増し、一気に青海省の川幅百米に満たない大峡谷―竜羊峽を直撃した。竜羊峽の発電所ができあがれば全国で二番目の大水力発電所となるはずである。その規模は長江の葛洲壩水利総合センターに次ぐ。一九七六年から着工の準備にとりかかっている。黄河上流の最大水量は毎秒三千四百立方メートルと予期して設計してあった。ところが昨年九月にもたらされた洪水は竜羊峽に至ると毎秒五千七百立方メートルに達した。：困い堰の水位は毎日二米ずつ上昇しつづけ、半月もしないうちに二十七米にも達した。これ以上上昇しつづけるならば、：統制のきかない水流は困い堰から溢れ出て、：許容貯水量を大きく上まわる十億立方メートルの水が毎秒三万八千立方メートルの奔流となって、またたく間に海拔二千六百メートルの高原の河谷を走りぬけ、下流の四省地区を直撃して人々の生命財産にはかり知れぬ損失をもたらすだろう。

竜羊峽の下流には有名な劉家峽水力発電所(甘肅省)がある。これは今のところ中国最大の水力発電所で、年間発電量は百二十万キロワット時。ここには長さ四百八十メートル、高さ百四十七メートルの大堰堤がぎざぎざである。ダム設計貯水量は五十七億立方メートルだが過去十余年間の土砂の沈澱によって有効貯水量は五十億立方メートル程度に下がっている。

九月十一日国務院は洪水の脅威にさらされた青海甘肅寧夏内蒙古の各自治区に向けて洪水を防止せよと緊急通知を発した。：

青海省ではこの指示にもとづきわずか三日三晩で四万の住民を安全地帯に避難させた。飛行機はその避難民のために解放軍が空からテントを投下したのである。：

億万の人命財産の安全がかかる囲い堰が河谷のなかに横たわっている：囲い堰の手まえばわきたつ黄河の水だ：竜羊峡一帯は海拔二千六百米もあり砂漠に近いうえ：空气中の酸素は平地より三十パーセントも少なく、水はセ氏八十度で沸騰する。：

洪水を防ぐための主要な工事は三つ。(一)囲い堰の安全確保—囲い堰の頂部に土囊を積み、幅五米、高さ千米の補助堰堤を作る。導流トンネルが崩壊した場合を考慮して囲い堰の斜面に石をつめた大きな鉄筋バスケット七百九十一個を積みあげ、おもてをコンクリートで固める。洪水が非常水路から溢れるのを防ぐため非常水路の堤高を更に三米かさあげする。トンネルの通気孔の安全を確保する。：囲い堰をたえずうち固めることで十億立方米の洪水をさえぎり毎秒千八百立方米の流量をおさえこんだ。九月十九日になると、上昇をつづけていた囲い堰の水位もついにゆっくりと下落し始めた。

甘肅省の劉家峡水力発電所のダム堰堤は國務院の指示では、洪水の最大排水量は毎秒五千立方米をこえてはならなかった。しかし蘭州、寧夏が危険にさらされたときは毎秒四千五百立方米以下におさえよとの指示であったが：…：わずか三日三晩の奮闘で堰堤の補強任務は終わった、國務院の要求よりも三十六時間も早く。：

劉家峡水力発電所での水量調節にもかかわらず、洪水のピークが蘭州に押しよせた時、なお水量は毎秒五千六百四十米に達し建国以来の最高水位を記録した。多くの箇所では洪水の水位は地上を上まわり、それが十日間もつづいて二十万人、九十余工場が脅威にさらされた。：初秋の雨の夜、標高千七百米の蘭州は気温が十度以下まで下がっていた。：わたしが到着した時も、洪水はなお地上より二米高い水位にあり、：蘭州市東端は海原と化していた。：つづげざまに半月もつづいたので、：蘭州市はのべ十六万人と車輛五千余台を投入して五

万余米に及ぶ堰堤を補強したが一部の損害は免れなかった、すなわち農民二千戸、土地四万ムー(一ムーは六千六百六十七アール)、工場十八、学校十三が冠水し経済的損失は二十万元をこえる(一元は約百三十円)。

寧夏回族自治区に入ると、包蘭鉄道(蘭州—包頭)は終始黄河に沿うて走りつづける。九月十六日の午前黄河洪水のピークが中衛県におしよせ、あつという間に長五十米にわたって堤防を決壊してしまつた。∴

寧夏は「塞上の江南」と呼ばれ、黄河に沿つた地域はすべて冲積平野、ふだん黄河の水が村や田畑に流れてゐるため黄河氾濫の防衛設備が不完全、∴

九月十六日の明けがた、毎秒五千二百九十立方メートルの速さで襲つた大洪水は寧夏に入ると随所で地上二米以上の水位に達し、土地七万余ムー、家屋四千余間(建物の大きさを表わす単位、柱と柱の間を一間とする)が水びたしとなつた。

九月二十日黄河の大洪水は内蒙古に達した。内蒙は地形も土地の状況もほとんど寧夏と同じだが時間の余裕があつたので、洪水がやってくるまでに軍民十六万を動員して日夜兼行堰堤を補強することができた。投入土砂量二百五十万立方メートル、補強された堰堤は三百四十キロ。ピーク時の洪水は秒速五千五百立方メートル。これが五日五晩もつづいたが軍民一体の警戒によつて事故は何一つ起きなかつた。

こうして一カ月余にわたる洪水とのたたかいはやっと終りをつげたのである。

二千年以来黄河の決壊によつてもたらされた大氾濫は千五百回以上、河道の大変動は二十六回に及び、そのたびに広大な地域が飢饉に見舞われ、多くの人が悲惨な目にあつたのではないか。

○水害後の「天府の国」(文秋氏の報告より)

人口一億を擁し天然資源にめぐまれた四川省は昔から「天府の国」といわれてきた。四川省は長江の上流に

あたり、その名前は長江の四大支流—岷江、沱江、嘉陵江、烏江がそこで合流することからつけられたといわれるくらいで省内には河川が非常に多い。昨一九八一年夏、連続的に大雨が降ったため、それらの河川が氾濫し、長江は建国(一九四九年)後最大の出水量となった。四川省も約一カ月の間につづげざまに二回、これまでにない大洪水に襲撃されたのである。

洪水の災害はひろく百三十五の縣市、千八百十万余人に及んだ。五十三の都市、千六百余の工場企業、八十萬ヘクタールの農作物が洪水にのまれ、九百人以上の死亡者を出した。また家屋の倒壊は百六十萬間、被災区の鉄道道路はほとんどがずたずたに寸断され、水利施設の被害は三萬八千箇所にのぼった。経済の直接損失は二十億元以上である。三回も洪水にのまれたり、水位が屋根を越したりした地域もあった。

しかしどこも水災後の復興工事が急ピッチに進んでいる。水害一カ月後には長江兩岸にある工場はほとんど生産が原状に復し、田や畑では農民が「災害の年にも農作を」の意気込みで、冠水して倒れた稲を用心深く助け起こしている。

中国には子供でもよく知っている「大禹治水」という伝説がある。昔、禹という英明の君主がいて寢食を忘れて中国の洪水を止めようとして、九つの鼎で竜をとりおさえ、子孫の幸福のためにつくすという話である。禹の郷里は四川省の汶川県で「九つの鼎」はその後「九つの峰」にかわるが、現在も大禹の郷里に隣接する茂文県にあって「九鼎山」と呼ばれている。

中国共産党四川省委員会は、植林植生に力を入れる、森林面積を拡大する、濫伐を禁止する、水上保持に力を入れる、など五つの案をすでに提出している。長江上流の森林の面積が増え、水土の流出が軽減されて「天府の国」四川盆地が二度と大洪水に見舞われないようにするためである。

以上で春秋時代の「大水」の状況もある程度想像推測できるだろう。

(二九八二―四―一五稿)